マテンゴ語の情報構造と語順

米　田　信　子
大阪女学院大学

【要旨】マテンゴ語の語順は情報構造に基づいて決定される。動詞の前には主題化された要素が位置するという原則があるため，例えば主題化された主語と焦点化された主語とでは置かれる位置が異なる。しかし原則に反して主題化されていない主語が動詞の前に置かれる場合がある。これは主語が本質的に持つ主題性によるものと考えられる。主語には，それ自体が焦点化されるか他の要素が主題化されない限り高い主題性がある。そのため主題がない文では，焦点化されていない主語が主題のような扱いになる。このようにマテンゴ語では主題性が重要な意味を持っているが，主題性が関与するのは語順だけであって，主語辞は主語の主題性にも位置にも関係なく常に主語に呼応する。これは，主語辞の呼応が主語の主題性と位置の両方に関係している多くのバントゥ諸語とは対照的である。マテンゴ語では情報構造は語順によって示され，文法関係は呼応によって示されている*。

キーワード：マテンゴ語，バントゥ諸語，情報構造，語順，主題性

1. はじめに

マテンゴ語はアフリカ赤道以南に広がるバントゥ諸語（ニジェール･コンゴ語族）のひとつで，タンザニア西南部ルブマ州ンビンガ県で話されている。マテンゴ語の語順には情報構造が関わっているが（米田 2004，2006），同時に，バントゥ諸語の基本語順であるとされる SVO がマテンゴ語においても基本語順として機能してい

* 本稿の内容についてはこれまでに幾つかの研究会や学会で発表の機会が与えられてきた。発表の際に（またその後にも）様々なコメントをしてくださった「ことばのミステリー研究会」,「対照研究セミナー」,「アフリカ言語研究会（Aflang）」のメンバーのみなさん，そして International Conference on Bantu languages（2007 年 10 月 4 ～ 6 日，ヨーテボリ大学）で質問やご指摘に加えて貴重なデータを提供してくださったバントゥ諸語研究者のみなさんに，この場を借りて感謝の意を表したい。また執筆にあたって多くのコメントをくださった定延利之氏と小森淳子氏，細部にわたり有益なご指摘とコメントをしてくださった査読者の先生方に感謝したい。いただいたコメントのうち，筆者の力不足やデータの不足のために本稿に十分反映させることができなかったものもある。これらについては今後の調査研究につなげていきたいと考えている。言うまでもなく本稿における誤りや不備はすべて筆者の責任である。なお本稿で用いるマテンゴ語のデータは，2003 年度および 2005 年度科学研究費補助金　基盤研究（A）「未調査のバントゥ諸語および近隣諸言語の記述・比較研究」（課題番号 15251004，研究代表者：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所　加賀谷良平），2007 年度科学研究費補助金　基盤研究（C）「バントゥ諸語における動詞派生形の形態・統語論比較研究」(課題番号 19520343, 研究代表者:大阪外国語大学　小森淳子)により 2003 年 8 月，2005 年 8 月～ 9 月，2007 年 8 月～ 9 月にンビンガ県リテンボ村で行なった調査において筆者が収集したものである。インフォーマントは John B. M. Kasuku 氏，1937 年ンビンガ県生れのマテンゴ人男性である。

るように思われる場合があり，文構造における情報構造と SVO との関係が曖昧であった。そこで本稿の目的は，マテンゴ語の動詞文における主題・焦点と主語・目的語の現れ方を検討し，語順の決定に情報構造がどのように関与しているのかを明らかにすることである。さらに，語順によって情報構造が表される一方で，主語は主題性や文中での位置とは無関係にその文法機能を保っていることを示す。

本論に入る前にマテンゴ語の名詞クラスと文法呼応について説明する。マテンゴ語には 19 種類の名詞クラスがあり，どの名詞もいずれかのクラスに属している[1]。この名詞クラスが文法呼応の基礎となる。動詞には，主語名詞が属する名詞クラスに呼応する主語辞（SM）と目的語名詞が属する名詞クラスに呼応する目的語辞（OM）が付加される。主語辞は，命令文の場合も含めて常に必須である。目的語辞は，目的語名詞が［+animate］の場合には必須だが，それ以外の場合は任意的で，むしろ付けないほうが一般的である。

(1)　a.　Íngoku　ji-a-mu-honywî　mwâ:na[2].
　　cook(9)　SM(9)-PAST-OM(1)-peck/PF　child(1)
　　「ニワトリは子供をつっついた。」
　　b.　Íngoku　ji-a-honywî　nsê:le.
　　cook(9)　SM(9)-PAST-peck/PF　rice(10)
　　「ニワトリは米をつっついた。」

---

[1] 名詞クラスと文法呼応のシステムはバントゥ諸語に共通する特徴で，比較のために名詞クラスにはバントゥ祖語を基にしたクラス番号がつけられている。本稿で用いる名詞クラスの番号はそれに従う。例文のグロスにつけた（　）で括った数字が名詞クラスの番号である。名詞についている場合はその名詞が属している名詞クラス，名詞以外についている場合は，その語や接辞が呼応している名詞の名詞クラスを示す。一人称と二人称に呼応している場合は（その場合は代名詞として機能），1sg, 1pl, 2sg, 2pl のように表す。その他，本稿で用いる略号は次のとおりである。SM ＝主語辞，OM ＝目的語辞，REF ＝再帰辞，R ＝関係辞，FUR ＝未来時辞，PAST ＝過去時辞，HABIT ＝習慣時辞，BF ＝基本語尾，SF ＝単純語尾，PF ＝完了語尾，INF ＝不定形接頭辞，Loc ＝場所クラス名詞接頭辞，Neg. ＝否定語。次のものは引用元の略号をそのまま用いる。PERF ＝完了時辞, INDIC ＝直説法語尾（チェワ語の例文），PRES ＝現在時辞，ASP ＝アスペクト辞（ルワンダ語の例文）。

[2] マテンゴ語には正書法がない。本稿のマテンゴ語の表記には Yoneda（2006）が提案している表記法を用いる。これはスワヒリ語の正書法を土台にしているが，母音に関してはスワヒリ語が 5 母音体系であるのに対しマテンゴ語は 7 母音体系であるため，下線を付けて次のように区別している。i=[i]，e̲=[e]，e=[ɛ]，a=[a]，o̲=[o]，o=[ɔ]，u=[u]。長母音は : で表す。またマテンゴ語にはアクセントの対立がある。´ を付したものは高音調，記号がないものは低音調である。これらの組み合わせて長母音には上昇調と下降調も現れる。長母音のアクセントは次のように表す。é:=éé，ê:=ée，ě:=eé。

動詞は形態素をハイフンで区切って表記しているが，形態素の結合によって生じる音韻交替は反映させていない。従って実現される形と異なる場合が多い。例えば（1a）の動詞であれば, ji-a-mu-honyol-iti（SM ―時辞― OM ―動詞語幹―語尾）という形態素に分けられるが，形態素の結合の際に，母音調和，母音融合，語尾の子音交替，末尾音節の脱落等の音韻規則が適用されて júnhonywî: と実現される。ただしポーズ位置を示すために（注 7 参照），動詞語幹と語尾については形態素が結合して音韻規則が適用された形を記することにする。その場合にはハイフンではなくスラッシュを使って read/PF のようにグロスをつけている。音韻規則についての詳細は米田（2000）を参照されたい。

主語名詞や目的語名詞が文中に現れていない場合には，主語辞と目的語辞は代名詞として機能する。

(2)　Ji-a-mu-honywî:le.
SM(9)-PAST-OM(1)-peck/PF
「それ（ニワトリ）は彼をつっついた。」

2. 主題と非主題の位置

はじめに，本稿でマテンゴ語の主題あるいは焦点と呼んでいるものがどのようなものかを簡単に説明する。主題とは，何について述べられているかの「何」にあたるもの，つまりコメントの対象になるものである。例えば「マリア」が来るのをみんなで待っているときになされる「マリアはもう到着したの？」,「マリアは今こっちに向かってるよ」といった発話はいずれも「マリア」について述べたり尋ねたりしたものであり，ここでの「マリア」は主題である。概ね日本語の「は」で表される要素に重なるが，上記のような会話の続きで「あ，マリアが来た」という場合には，この「マリア」もマテンゴ語では主題である。主題は会話の中で前提となる情報であるが，それに対して焦点は新情報である。焦点はコメントの中のコアとなる新情報であって，情報的に他よりも際立っていると話者が考える要素である[3]。焦点の典型例としてはWH疑問文に対する答えが挙げられる。例えば「マリアが来た」という発話が「誰が来たの？」という質問に対する答えであれば「マリア」は焦点である。主題でないもの（非主題）がすべて焦点というわけではなく，その中には主題でも焦点でもないもの（非主題・非焦点）もある。例えば全体が新情報となるような文の場合には，前提となる情報がないので主題もないが，すべての要素の情報価値が横並びとなり情報的に際立っているものがないので焦点もない。従って「何があったの？」という質問に対して「マリアが来た」と答えた場合には,「マリア」は主題でも焦点でもない。

2.1. 主語と目的語

マテンゴ語の動詞文においては，主語が現れる位置は，それが主題化されている場合とそうでない場合とで異なっている。

(3)　a.　María　ju-híkǐ:te.
Maria(1)　SM(1)-arrive/PF
（マリアをみんなで待っていて）「マリアが来た。」　María は主題

[3] ただし焦点は必ずしも強調されているわけではない。特に強調する必要がある場合には次のような分裂文が用いられる。

i)　Ju-bí　Marî:a,　jo:　ju-híkǐ:te.
SM(1)-be/PF　Maria (1)　R(1)　SM(1)-arrive/PF
「到着したのはマリアだ。」

b.　Ju-híkití　　Marî:a.
　　SM(1)-arrive/PF　Maria(1)
　　（「誰が来たの？」に答えて）「マリアが来た。」　María は焦点
　　（「何があったの？」に答えて）「マリアが来た。」María は非主題・非焦点

バントゥ諸語の基本語順は SVO であるとされているが，マテンゴ語の場合には（3b）が示しているように主題化されていない主語は動詞の後ろに置かれる。（3a）と（3b）はいずれも文法的であるが，単なる語順のバリエーションではない。誰が来たのかを問題にしている場合に María「マリア」を動詞の前に置いた（3a）が用いられると不自然である。反対に「マリア」のことが話題になっているとき，つまり「マリア」が主題化されている場合には「マリア」を動詞の後ろに置いた（3b）は用いられない。

主語の場合と同様に，目的語が置かれる位置も主題化されている場合とそうでない場合とでは異なる。

（4）　a.　Kitábu　se:　　tu-a-lǫ́mbi:te.
　　book(7)　that(7)　SM(1pl)-PAST-buy/PF
　　（ある特定の本のことを話題にして）「その本は私たちが買った。」
　　b.　Tu-a-lǫ́mbiti　　kitâ:bo.
　　SM(1pl)-PAST-buy/PF　book(7)
　　（「何を買ったの？」に答えて）「本を買った。」

例えば，ある特定の本について「それをどのようにして入手したか」を話している場合であれば，話題になっている kitábu se:「その本」は動詞の前に置かれて主題化される。一方「何を買ったのか？」を問題にしている場合であれば，「本」は焦点であり，動詞の後ろに置かなければならない。目的語が主題化されて主語が焦点化される場合には（5）のように OVS の語順で現れる。

（5）　Ílasí　　ju-a-hémála　　Tóma:si,　íjabujabu
　　potatoes(8)　SM(1)-PAST-buy/SF　Thomas(1)　yams(8)
　　ju-a-hémála　　Marî:a.
　　SM(1)-PAST-buy/SF　Maria(1)
　　（かごに入ったヤム芋とじゃが芋を見た人に「誰が買ったの？」と尋ねられて）
　　「じゃが芋はトマシが買って，ヤム芋はマリアが買った。」

SVO を基本語順とする多くのバントゥ諸語において，SVO 以外の語順になる場合には通常よりも厳密に目的語辞が要求される。Givón（1976）は，目的語が文頭に置かれた場合に目的語辞が必須になることを，バントゥ諸語の一般的なルールであると述べている。

〈チェワ語〉（Bresnan and Mchombo 1987）

(6)　SVO 語順

Njûchi　zi-ná-(wá-)lum-a　alenje.
bees(10)　SM(10)-PAST-(OM(2))-bite-INDIC　hunters(2)
「蜂が／はハンターを刺した。」

(7)　OVS 語順

a.　Alenje　zi-ná-wá-lum-a　njûchi.
hunters(2)　SM(10)-PAST-OM(2)-bite-INDIC　bees(10)
「ハンターは蜂が刺した。」

b.　*Alenje　zi-ná-lum-a　njûchi.
hunters(2)　SM(10)-PAST-bite-INDIC　bees(10)

(6)，(7) はチェワ語の例である。チェワ語では，目的語が動詞の直後に置かれている場合には目的語辞は任意的である。しかし目的語が文頭に置かれると目的語辞が必須となり，目的語辞がついていない（7b）は非文となる。これは，語順が SVO になってないため呼応接辞によって文法関係を示さなれければならないからである。従ってチェワ語では主語と目的語が異なるクラスに属している場合，つまり呼応接辞によって文法関係を示すことができる場合にしか OVS 語順にすることはできない。言い換えれば，チェワ語では文法呼応だけでなく語順も文法関係を示しているということである。

ところがマテンゴ語で起きる現象は全く逆である。マテンゴ語では目的語名詞が［+animate］の場合には SVO 語順においては（8a）のように目的語辞が必須である。従って目的語辞のない（8b）は非文である。しかし目的語が主題化されて文頭に置かれると，目的語が［+animate］であっても（9）のように目的語辞は任意的となる。

(8)　SVO 語順

a.　Lujúsi　lu-a-mú-lumíti　Kinûnda.
bee(11)　SM(11)-PAST-OM(1)-bite/PFMr.　Kinunda(1)
「蜂が／はキヌンダ氏を刺した。」

b.　*Lujúsi　lu-a-lúmíti　Kinûnda.
bee(11)　SM(11)-PAST-bite/PF　Mr. Kinunda(1)

(9)　OSV 語順[4]

Kinûnda　lu-a-(mú-)lumíti　lujû:se.
Mr. Kinunda(1)　SM(11)-PAST-(OM(1))-bite/PF　bee(11)
「キヌンダ氏は蜂が刺した。」

[4] マテンゴ語には受身構文がなく，目的語を文頭に置いて主題化した文は受身文の機能をしている。スワヒリ語や英語の受身文をマテンゴ語に訳してもらうと，目的語を主題化した文が返ってくる。

さらにマテンゴ語では主語と目的語が同じクラスに属する場合にも，目的語を動詞の前において主題化することが可能である。

(10)　a.　Tómasi　ju-mu-kómití　Samué:li.
Thomas(1)　SM(1)-OM(1)-kill/PF　Samuel(1)
「トマシが／はサムエリを殺した。」(SVO の解釈)

b.　Tómasi　ju-kómití　Samué:li.
Thomas(1)　SM(1)-kill/PF　Samuel(1)
「トマシはサムエリが殺した。」(OVS の解釈)

(10a) では目的語辞が入っているので動詞の後ろにある Samuéli「サムエリ」が目的語として解釈される。それに対して (10b) のように目的語辞が入っていない場合は動詞の後ろにある「サムエリ」を目的語して解釈することができないため，文頭にある Tómasi「トマシ」が主題化された目的語ということになる。このような主題化ができるのは，マテンゴ語の語順が文法機能ではなく情報構造による次のような原則を優先しているからである。

- 主題化された要素は動詞の前に置かれる
- 主題化されていない要素は焦点も含めて動詞の後ろに置かれる

2.2. 非主題の主語

しかしながら上記の原則にあてはまらない場合がある。主題も焦点もない動詞文は次のような語順で現れる。

「何があったの？」という質問に対する答えとして

(11)　a.　Ji-a-búmíti　jímbwa.　(完了過去形)
SM(9)-PAST-bark/PF　dog(9)
「犬が吠えた。」

b.　#Jimbwá　ji-a-búmî:te.
dog(9)　SM(9)-PAST-bark/PF

(12)　a.　Jimbwá　ji-a-mú-lumíti　ńge:ne.　(完了過去形)
dog(9)　SM(9)-PAST-OM(1)-bite/PF　guest(1)
「犬が客をかんだ。」

b.　#Ji-a-mú-lumíti　jimbwa　ńge:ne.
SM(9)-PAST-OM(1)-bite/PF　dog(9)　guest(1)

c.　#Ńgeni　ji-a-mú-lumíti　jímbwa.
guest(1)　SM(9)-PAST-OM(1)-bite/PF　dog(9)

(11a)，(12a) はどちらも「何があったの？」という質問に対する答えである。従ってこれらは文全体が新情報であり，特定の要素が主題化されたり焦点化されたりは

していない。目的語がない（11a）では主語は動詞直後に置かれている。これは主題化されていない要素が動詞の後ろに置かれているので，原則どおりである。しかし目的語がある（12a）では，主語は主題化されていないにも拘らず動詞の前に置かれている。目的語がある場合に（12b）のように主語を動詞の後ろに置くと主語に焦点があたってしまい，「何かが噛んだ」という前提があるような印象を与えてしまう。また動詞の前に主題化されていない主語を置くことはできても，主題化されていない目的語を置くことはできない。（12c）では動詞の前に置かれた目的語の ńgeni「客」が主題化されてしまうため，「何があったの？」ではなく「お客さんに何があったの？」という文脈での発話になってしまう。

文中に主題も焦点もない場合に主語が動詞の前に置かれるということは，動詞の前に置かれた主語が必ずしも主題化されているわけではないということになる。従って SVO の語順の文では，（13）のように主語 Tómasi「トマシ」が主題化されている場合と「トマシ」が主題化も焦点化もされていない場合とが考えられる。

（13）　Tómasi　ju-a-kásúlja　kitábu　sângo.
　　Thomas(1)　SM(1)-PAST-tear/SF　book(7)　my(7)
　　a.（トマシのことを話題に取り上げて）「トマシは私の本を破った。」
　　b.（子供が泣いているので理由を尋ねたら）「トマシが私の本を破った。」

米田（2004，2006）は，マテンゴ語の語順には情報構造が重要な役割を担っているとしながらも，（13b）のような SVO が存在することについて「主題や焦点がない場合には基本語順 SVO が優先される」と説明している。つまり，そこでは SVO がマテンゴ語の基本語順であることが前提となっている。しかしながら，SVO で現れるのは（12a）や（13b）のように主語名詞と目的語名詞の両方が文中に現れる場合だけであって，主語名詞しかない場合の語順は（11a）が示しているように VS である。マテンゴ語には文末に現れることができない活用形[5]もあるが，（11a）と（12a）の動詞に用いている過去完了形にはそのような制限はなく，文末に現れることも可能である。従って（11a）の主語が動詞の後ろに置かれているのは統語的な制限によるものではない。

もし SVO をマテンゴ語の基本語順とするならば，この VS という語順はどのように考えるべきなのか。頻度に関しても決して SVO が VS よりも多いわけではない。目的語の有無によって 2 種類の基本語順を認める必要があるのか，またこれら 2 種類の語順と先に挙げた情報構造による原則とはどう係わっているのか，といった疑問が出てくる。そこで次節では動詞の前に置かれる要素と動詞の後ろに置かれる要素について詳しく見ていくことにする。

[5]「単純形」という活用形である。本稿の例文で動詞の語尾に SF（単純語尾）がついているものはすべて単純形である。この活用形は常に後続語を必要する。従って文末に現れることができないため，動詞にひとつしか従属語がない場合には統語的制限からそれを動詞の後ろに置かなければならない（米田 2006）。

3. 各要素の位置

3.1. 動詞の前に置かれる要素

原則では動詞の前に置かれるのは「主題化された要素」であるが，それ以外に（12a）や（13b）が示すように「非主題・非焦点の主語」が置かれることもある。

3.1.1. 主題

2.1. で例を挙げた主語や目的語だけでなく，他の要素も動詞の前に置くことで主題化される。以下，主題化された要素は太字で表す。

（14）**Mwaka gôngi** tu-i-hémála ng'ômbe.
year(3) other(3) SM(1pl)-FUR-buy/SF cow(9)
「来年は牛を買う。」

（15）a. **Tómasi** li-hálabwikí ligáli lâ:ke.
Thomas(1) SM(5)-break/PF car(5) his(5)
「トマシは車が壊れている。」

b. **Ligáli láka Tómasi** li-hálabwí:ke.
car(5) of(5) Thomas(1) SM(5)-break/PF
「トマシの車は壊れている。」

（14）は連用修飾語を主題化した例で，例えば来年の抱負を語るような場合の発話である。（15a）の主題は Tómasi「トマシ」である。このように動詞の従属語[6]以外の要素でも，主語の所有者であれば主題にすることができる。後ろに続く「車が壊れている」というコメントは「トマシ」についてのもので，ここでは主語辞が呼応しているのは動詞の後ろにある ligáli lâ:ke「彼の車」である。もちろん（15b）のように主語の ligáli láka Tómasi「トマシの車」を主題にすることもできる。

3.1.2. 主語

主語以外の要素は主題化されていなければ動詞の前に置くことはできないが，（12a），（13b）が示すように主語は主題化されていなくても動詞の前に置くことができる。ただし動詞の後ろに別の要素がある場合に限られる。

（16）土鍋を借りに行って，その事情を尋ねられて

a. Ju-kájwi amâ:bo.
SM(1)-break/PF mother(1)
「お母さんが割ったの。」

[6] 本稿では，動詞と格関係や修飾関係にある要素を従属語と呼ぶことにする。具体的には，主語，目的語，連用修飾語である。連用修飾語には，副詞，時を表す名詞句，場所クラス名詞，道具を表す前置詞句などがある。

b. #Amábu　ju-kájwí:le.
　mother(1)　SM(1)-break/PF
c. Amábu　ju-kájwi　pu-lukê:la.
　mother(1)　SM(1)-break/PF　Loc(18)-morning
　「お母さんが今朝割ったの。」
d. #Ju-kájwi　amábu　pu-lukê:la.
　SM(1)-break/PF　mother(1)　Loc(18)-morning

例えば土鍋を隣の家に借りに行き，なぜ自分の土鍋を使わないのかと隣人に事情を尋ねられたとする。そこでは前提となる情報は kibẽga「土鍋」だけで，amábu「お母さん」を主題にすることはできない。主題化されていない主語を動詞の前に置くことができるのは（16c）のように動詞の後ろに別の要素がある場合だけである。（16a）のように主題化されていない主語が唯一の従属語である場合には，それを動詞の前に置くことはできない。反対に（16d）のように他の要素があるのに主語を動詞の後ろに置くと「お母さん」が焦点化されてしまい，「誰かが割った」という前提があったような印象になってしまう。

また動詞の後ろに別の要素があっても，主語が焦点化されている場合には主語を動詞の前に置くことはできない。

（17）割れた土鍋を見つけた友人に「誰が割ったの？」と尋ねられて
a. Ju-kájwi　amâ:bo.
　SM(1)-break/PF　mother(1)
　「お母さんが割ったの。」
b. #Amábu　ju-kájwí:le.
　mother(1)　SM(1)-break/PF
c. #Amábu　ju-kájwi　pu-lukê:la.
　mother(1)　SM(1)-break/PF　Loc(18)-morning
d. Ju-kájwi　amábu　pu-lukê:la.
　SM(1)-break/PF　mother(1)　Loc(18)-morning
　「お母さんが今朝割ったの。」

（16）の場合には，自分の土鍋は誰かに貸してあげている，別の料理が入っているので使えないなど，いろいろな状況が考えられる。従って「誰かが割った」という前提はなく，文全体が新情報である。つまり amábu「お母さん」は主題化されていないだけでなく焦点化もされていない。それに対して（17）は，目の前に割れた土鍋があり「誰が割ったのか？」と尋ねられているのだから，「誰が」にあたる「お母さん」は焦点である。このように主語が焦点化されている場合には，別の要素が動詞の後ろにあっても主語を動詞の前に置くことができない。この場合には（17d）

のように主語は動詞の直後に置かれる。

3.1.3. 遊離主題

動詞の前に置くことができる要素は基本的にひとつだけであるが，（18）～（20）のように文頭に置かれた主題の後ろにポーズを入れると，動詞の前にふたつの要素を置くことが可能になる。ポーズによって音韻フレーズが分けられ，文頭に置かれた主題は単独で音韻フレーズを作ることになる[7]。本稿では文頭に置かれて単独の音韻フレーズを持つ主題を「遊離主題」と呼ぶことにする。遊離主題が単独で音韻フレーズを作るのに対して，通常の主題は後ろにポーズがなく，主題とそれに続く動詞句がひとつの音韻フレーズになる。音韻フレーズの境界は「, 」で表す。

（18）**lí:so,**　María　ju-a-gólúla　kibê:ga.
yesterday　Maria(1)　SM(1)-PAST-wash/SF　clay pot(7)
「昨日は，マリアは／が土鍋を洗った。」

（19）**Pulúbanza,**　bandu　bîngi　a-tenda　kú-hi:na.
backyard(17)　people(2)　many(2)　SM(2)-do/BF　INF-dance/BF
「裏庭では，大勢の人が踊っている。」

（20）**Tóma:si,**　**ligáli**　**lâ:ke**　li-hálabwí:ke.
Thomas(1)　car(5)　his(5)　SM(5)-break/PF
（「トマシに送ってもらえば？」に対して）「トマシは, 彼の車は壊れている。」

cf.　**Tómasi**　li-hálabwikí　ligáli　lâ:ke.　（15a. 再掲）
Thomas(1)　SM(5)-break/PF　car(5)　his(5)
（「トマシはなぜ来なかったの？」に対して）「トマシは車が壊れている。」

（18）と（19）は，遊離主題，主語，動詞，さらにその後ろに別の要素がある。この場合は動詞の前に置かれている主語が必ずしも主題化されているわけではない。例えば（18）は「昨日マリアがしたこと」を話題にしているような場合，つまり lí:so「昨日」と María「マリア」の両方が共有されている情報として主題化されて

[7] 音韻フレーズとは，文法上のフレーズではなく，アクセントやイントネーションが実現される単位である。遊離主題の後ろに「ポーズを入れる」と書いたが，実際の発話においては文中の音韻フレーズの境界に必ずしも際立った文字どおりの「ポーズ」が入るとは限らない。しかし音韻フレーズ境界の有無は音韻現象によって判断できる。マテンゴ語には，①音韻フレーズ内の後ろから 2 音節め（以下「次末音節」）が長母音化する（ただし NC の前の母音は常に長母音化する。またもともと長母音を持つ音節もある。これらの場合は長母音化によるフレーズ末の区別はできない），②フレーズ末では u と i がそれぞれ o と e で現れる（ただし Samuel や Thomas のようにもともと語末に母音のなかった固有名詞から派生しているものは除く），③フレーズ末の高音調（H）は左隣のモーラに移動する，といった音韻規則がある。従って遊離主題かどうか，つまり主題化された要素の後ろに音韻フレーズの境界があるかどうかは次の 3 点によって判断することができる。
・次末音節が長母音化していないか
・語末の u, i がそれぞれ o, e で現れていないか
・語末に H が現れていないか

いる可能性も考えられるが，遊離主題の「昨日」だけが主題化されていて，それに続く主語以下が「昨日」についてのコメントであるという解釈のほうが一般的である。（19）の場合も，特別な文脈がなければ主題化されているのは遊離主題のpulúbanza「裏庭」だけで，それに続く「大勢の人が踊っている」は「裏庭」についてのコメントであると解釈される。

それに対して動詞の後ろに別の要素がない（20）は，遊離主題だけでなく，その後ろにある主語も主題化されている。3.1.2. で述べたように，主題化されていない主語を動詞の前に置くことができるのは動詞の後ろに別の要素がある場合だけである。従って（20）の主語 ligáli lâ:ke「彼の車」が動詞の前に置かれているのは，それが主題化されているからである。例えば誰かが「トマシに送ってもらえば？」と提案したとする。そこには「車」という語は出てきていないが，会話に参加している者にとって「送ってもらう」という話題の前提として「車」が共有されている情報になっている。

マテンゴ語の主題を日本語の「は」で表される要素にほぼ重なると先に説明したが，遊離主題はひとつの要素を取り出して単独の音韻フレーズを作るわけであるから，それよりもかなり明確で意識的な主題化である。

遊離主題がある場合，遊離主題と動詞の間に置くことができるのは主語だけである。また，動詞の前に主語がある場合には，目的語を遊離主題にすることはできない。従って動詞の前に 2 つの要素を置く場合には，その組み合わせと順番は「目的語以外の要素」±「主語」に限られる。従って，動詞の前に主語があるのに目的語を遊離主題にしている（21a）や，遊離主題の後ろに目的語を続けた（22a）は非文である[8]。

（21）　a.　*__Kibê:ga,__　María　ju-a-gólúla　lí:so.
clay pot(7)　Maria(1)　SM(1)-PAST-wash/SF　yesterday
（土鍋は，マリアが昨日洗った。）

b.　__Kibéga__　ju-a-gólúla　María　lí:so.
clay pot(7)　SM(1)-PAST-wash/SF　Maria(1)　yesterday
「土鍋はマリアが昨日洗った。」

c.　__Kibê:ga,__　ju-a-gólúla　María　lí:so.
pot(7)　SM(1)-PAST-wash/SF　Maria(1)　yesterday
「土鍋は，マリアが昨日洗った。」

（22）　a.　*__Lí:so,__　kibéga　ju-a-gólúla　Marî:a.
yesterday　clay pot(7)　SM(1)-PAST-wash/SF　Maria(1)
（昨日は，土鍋はマリアが洗った。）

[8] ただし，遊離主題の後ろに明確なポーズを置いて発話をいったん「休止」すれば，（21a）や（22a）のような「目的語以外の要素」±「主語」以外の組み合わせも可能になる。

b.　**Li:sú**　ju-a-ki-gólúla　Marî:a.
yesterday　SM(1)-PAST-OM(7)-wash/SF　Maria(1)
「昨日はそれ（土鍋）をマリアが洗った。」

c.　**Li:sú**　ju-a-gólúla　María　kibê:ga.
yesterday　SM(1)-PAST-wash/SF　Maria(1)　clay pot(7)
「昨日はマリアが土鍋を洗った。」

動詞の前に要素がひとつしか置かれていない場合には，それが遊離主題である可能性もある。（22b）の li:sú も，後ろにポーズを置いて遊離主題にすることもできる。それが遊離主題なのかどうかは，その要素の後ろにポーズすなわち音韻フレーズの境界があるかどうかで判断する（注 7 参照）。

（23）a.　**Kibéga**　ju-a-gólúla　lí:so.
clay pot(7)　SM(1)-PAST-wash/SF　yesterday
「土鍋は彼女が昨日洗った。」

b.　**Kibê:ga,**　ju-a-gólúla　lí:so.
clay pot(7)　SM(1)-PAST-wash/SF　yesterday
「土鍋は，彼女が昨日洗った。」

（24）a.　Mwalímu　ju-longelá　pu-lukê:la.
teacher(1)　SM(1)-chat/SF　loc(16)-morning
「先生は／が朝おしゃべりをしていた。」

b.　**Mwalí:mo,**　ju-longelá　pu-lukê:la.
teacher(1)　SM(1)-chat/SF　loc(16)-morning
「先生は，朝おしゃべりをしていた。」

（23a）のように動詞の前にある kibéga「土鍋」の次末音節が短母音で現れる場合は動詞との間にポーズはなく，主題と動詞は同じ音韻フレーズである。一方（23b）のように次末音節が長母音化して kibê:ga で現れる場合は，動詞との間にポーズがあるので遊離主題ということになる。既述のとおり動詞の前にある主語は主題化されているとは限らないが，遊離主題になる主語は必ず主題化されている。

このように，動詞の前に要素がひとつしかない場合には，それは遊離主題にも通常の主題にもなり得る。ただし本稿で検討しているのは SVO の主語の位置で起きる主題化であるのに対し，遊離主題が置かれるのは SVO の外である。そこで，どちらの主題化も可能な場合は，ポーズなしの主題として扱うことにする。

3.2.　動詞の後ろに置かれる要素

動詞の後ろに置かれるのは非主題である。非主題には，焦点化されている要素と主題でも焦点でもない要素の両方が含まれる。以下焦点となっている要素はイタリックで示す。

3.2.1. 焦点

WH 疑問文の答えや対比される要素は焦点化される。動詞を焦点化する場合には（28）のように複動詞形が用いられる。複動詞形は，動詞 -tend-「する」に焦点となる動詞の不定形（名詞形）を後続させた活用形である。

（25）　Ba-a-hínâ　*akósi*　*bí:to*.
SM(2)-PAST-dance/SF　friends(2)　our(2)
（「誰が踊ったの？」の答えとして）「*私たちの友人が* 踊った。」

（26）　N-kologa　*úgwẹ̱:mbe*.
SM(1sg)-stir/SF　local brew(14)
（「何をかき混ぜているの？」の答えとして）「*地酒を* かき混ぜている。」

（27）　Ju-í-butuka　*kilâ:bo*.
SM(1)-FUR-return/SF　tomorrow
（「彼はいつ帰ってくるの？」の答えとして）「*明日* 帰ってくる。」

（28）　Ju-a-tenda　*kú-butu:ka*.
SM(1)-PAST-do/SF　INF-run/BF
（「トマシは何をしていたの？」の答えとして）「彼は*走っていた*。」

（29）　Ki-hálabukití　*kibẹ̱:ga*,　nga:　sahâ:ne.
SM(7)-break/PF　clay pot(7)　Neg.　plate(9)
（「皿が割れたの？」と聞かれて）「皿ではなく土鍋が割れた。」

3.2.2. 非主題・非焦点

以下は非主題・非焦点の例である。（30）は全文が新情報であるから動詞の後ろに置かれている mwâna「子供」は主題化も焦点化もされていない。（31）は動詞の後ろにあるのが不定名詞である。不定名詞は主題になりにくいだけでなく，通常は焦点としての情報価値もない。

（30）　Ju-a-lí-hejwî　mwâ:na.
SM(1)-PAST-REF-hurt/SF　child(1)
（悲しんでいる友人に「どうしたの？」と尋ねた答えとして）「子供が怪我をしたの。」

（31）　Ju-jẹ̱mba　mûndo.
SM(1)-sing/BF　person/someone(1)
（歌声が聞こえて）「誰かが歌っている。」

バントゥ諸語の中には，焦点化されている場合とそうでない場合で名詞の声調パターンが異なる言語や（例えばマクワ語：Van der 2006），焦点の前でダウンステップが起きる言語（例えばチェワ語：Dawning et al. 2004）など，プロソディによって焦点が区別される言語もある。マテンゴ語においても，焦点となっている要素を

際立たせるために（32b）のほうが（32a）よりも mundu「人」を強く発音するということはあるだろうが，マクワ語やチェワ語のような規則的なプロソディの違いは見られない[9]。

（32）a.　Ju-híkiti　　mûndo.
　　SM(1)-arrive/PF　person/someone
　　（ノックの音がしたので）「誰か来た。」 mûndu は非主題・非焦点
　　b.　Ju-híkiti　　*mûndo,*　　nga:　líhimba.
　　SM(1)-arrive/PF　person/someone(1)　Neg.　lion(5)
　　「ライオンではなく*人が*来た。」 mûndu は焦点

3.2.3. 動詞の後ろの語順

従属語がひとつの場合には，それが焦点でも非主題・非焦点でも，動詞の直後に置かれているが，複数の要素が動詞の後ろにある場合には，焦点化されるものが動詞直後に置かれる。また焦点化されるのは動詞直後に置かれている要素だけである[10]。

（33）a.　N-a-hándíka　　balúa　　lí:so.
　　SM(1sg)-PAST-write/SF　letter(9)　yesterday
　　「私は昨日*手紙を*書いた。」balúa は焦点
　　「私は昨日手紙を書いた。」balúa は非主題・非焦点
　　b.　?N-a-hándíka　　*li:sú*　　balû:a.
　　SM(1sg)-PAST-write/SF　yesterday　letter(9)
　　（「いつ手紙を書いたの？」に対して）「私は*昨日*手紙を書いた。」

---

[9] 例文（11），（12）で jimbwá の現れ方が文中の位置によって異なっているが，これは主題化や焦点化によるものではなく，ポーズ前に適用される音韻規則によるものである（注 7 参照）。また（12b）で jimbwa となっているのは，後続語の語頭に H があるため，形態素境界で H が重なった場合には前方の H がキャンセルされるという音韻規則が適用されたことによる。

[10] 実際の発話では，ある要素に焦点をあてる場合には（25）～（29）のように動詞の直後にその要素を置くだけで，それ以外の要素をさらにその後ろに続けることはあまり現実的ではない。複数の要素を動詞に後続させた段階で動詞直後にある要素の焦点性も弱化してしまっているように思われる。

動詞の後ろに要素が複数あっても焦点となるのは動詞直後の要素だけだが，次のような疑問文とそれに対する答えは可能である。ただし疑問文のほうには 2 つの要素の間にかなり明確なポーズを入れなければならない。また，答えのほうは lí:so の前にポーズを入れると不自然だということであるが，kitábu と lí:so の両方に同じように焦点があてられているかどうかは確認が必要である。

ii)　Tómashi　ju-a-hémála　　li:,　　ná　ki ?
　　Thomas(1)　SM(1)-PAST-buy/FF　when　and　what
　　「彼はいつ何を買ったの？」

iii)　Ju-a-hémála　　kitábu　　lí:so.
　　SM(1)-PAST-buy/SF　book(7)　yesterday
　　「昨日本を買った。」

(33) はどの要素を焦点化することもなく「ところで私昨日手紙を書いたの」という場合にも用いられるが，balúa「手紙」が焦点化されている場合にも用いられる。例えば「昨日何を書いたの？」あるいは「何を書いたの？」と尋ねられた場合，問われている「手紙」だけを答えれば十分であるから（33a）のように答えることは冗長な印象を与えるだろうが，可能である。その場合に li:sú「昨日」は，旧情報だが主題化されていないか，あるいは新情報であってもあまり情報価値のないものということになる。しかし（33a）で焦点になり得るのは動詞直後にある balúa「手紙」だけで，（33a）を「いつ手紙を書いたのか」が問われているときに用いることはできない。一方（33b）は，好まれる語順の文ではないが（後述），用いることができるのは li:sú「昨日」が焦点になる場合だけであり，「トマシは何を書いたの？」の答えとしては使えない。

従って何かを焦点化する場合にはそれを動詞の直後に置かなければならないのだが，可能な語順には制限がある。

(34) a. Ju-a-sóma　*Tómasi*　kitâ:bo.
SM(1)-PAST-read/SF　Thomas(1)　book(7)
（「誰が読んだの？」に答えて）「*トマシが*本を読んだ。」

b. ??Ju-a-sómá　*kitábu*　Tóma:si.
SM(1)-PAST-read/SF　book(7)　Thomas(1)
（トマシが*本を* 読んだ。）

c. Tómasi　ju-a-sómá　kitâ:bo.
Thomas(1)　SM(1)-PAST-read/SF　book(7)
「トマシは／が本を読んだ。」
（トマシが何を読んだかを取り上げて）「トマシが*本を* 読んだ。」

(35) a. Ju-a-bútúka　*Tómasi*　lí:so.
SM(1)-PAST-run/SF　Thomas(1)　yesterday
（「誰が走ったの？」に答えて）「*トマシが*昨日走った。」

b. ??Ju-a-bútúka　*li:sú*　Tóma:si.
SM(1)-PAST-run/SF　yesterday　Thomas(1)
（トマシが*昨日* 走った。）

c. Tómasi　ju-a-bútúka　lí:so.
Thomas(1)　SM(1)-PAST-run/SF　yesterday
（「トマシはいつ走ったの？」に答えて）「トマシは*昨日* 走った。」
「トマシは／が昨日走った。」

動詞の後ろに主語とそれ以外の要素がある場合には，（34a），（35a）のように主語が常に優先的に動詞の直後に置かれる。ただしこれらの文が用いられるのは，主語が焦点化されている場合に限られる。主語が焦点でない場合には，主語以外の要素が焦点化されているかどうかに関係なく（34c），（35c）の語順になる。（34b）や（35b）

については，目的語や連用修飾語が焦点化されていれば「言えないわけではない」とするマテンゴ語話者もいるが，主語以外の要素が焦点化される場合には，主語は主題化されていなくても文頭に置かれるのが基本であって，（34c）や（35c）に比べると（34b）や（35b）の容認度はかなり低い。

動詞の後ろに目的語と連用修飾語がある場合，目的語が焦点化されているときだけでなく，目的語が焦点化されていない場合でも目的語の方が動詞の直前に置かれる。従って連用修飾語を焦点化するためには，目的語を省略するか，あるいは（36c），（37c）のように目的語を代名詞化（接辞化）しなければならない。ただし連用修飾語の種類によっては目的語の前に置くことが認められるものもある。（37b）のように時を表す連用修飾語の場合には容認度が上がる。ただしこれが認められるのは li:sú「昨日」が焦点の場合だけで，焦点化されていなければ（37b）は使えない。

（36）a.　Ju-a-sómá　bibulía　ku-nyûmba.
SM(3sg)-PAST-read/SF　bible(9)　Loc(17)-house(9)
「彼は家で聖書を読んだ。」
（「彼は何を読んだの？」に答えて）「彼は家で*聖書を* 読んだ。」

b.　??Ju-a-sómá　*ku-nyûmba*　bibulî:a.
SM(3sg)-PAST-read/SF　Loc(17)-house(9)　bible(9)
（彼は*家で* 聖書を読んだ。）

c.　Ju-a-jí-somá　*ku-nyûmba.*
SM(3sg)-PAST-OM(9)-read/SF　Loc(17)-house
（「彼は聖書をどこで読んだの？」に答えて）「彼は*家で* それを読んだ。」

（37）a.　Ju-a-sómá　bibulía　lí:so.
SM(3sg)-PAST-read/SF　bible(9)　yesterday
「彼は昨日聖書を読んだ。」
（「彼は何を読んだの？」に答えて）「彼は昨日*聖書を* 読んだ。」

b.(?) Ju-a-sómá　*li:sú*　bibulî:a.
SM(3sg)-PAST-read/SF　yesterday　bible(9)
（「いつ聖書を読んだの？」に答えて）「彼は*昨日* 聖書を読んだ。」

c.　Ju-a-jí-somá　*lí:so.*
SM(3sg)-PAST-OM(9)-read/SF　yesterday
（「いつ聖書を読んだの？」に答えて）「彼は*昨日* それを読んだ。」

動詞の後ろに，主語，目的語，連用修飾語がある場合には，（38）の語順以外は非文である。

（38）Ju-a-sóma　*Tómasi*　kitábu　lí:so.
SM(1)-PAST-read/SF　Thomas(1)　book(7)　yesterday
「*トマシが* 昨日本を読んだ。」

ただし（38）の語順が認められるのは「昨日本を読んだのは誰か」が問題になっている場合だけである。すなわち焦点は主語 Tómasi「トマシ」であり，それ以外の kitábu「本」や li:sú「昨日」は，主題化はされていないが旧情報であるか，あるいは新情報であっても話者にとって「トマシ」ほどには重要でない情報の場合である。もし主語が焦点でないならば，(34c) や (35c) の場合と同じく主語は文頭に置かれる。

(39)　Tómasi　ju-a-sómá　kitábu　lí:so.
　　Thomas(1)　SM(1)-PAST-read/SF　book(7)　yesterday
　　「トマシが昨日本を読んだ。」

4. 語順とスロットの設定

4.1. 動詞の前のスロット

3.1. で見たように，動詞の前に現れる要素は，主題，主語，遊離主題，である。これらがすべて異なる種類のスロットに入ると考えると図 1a のようになる。

図 1：動詞の前のスロット案

a. [1. 遊離主題] , [2. 主題] [3. 主語] V

b. [1. 遊離主題] , [2. 主語] V

c. [1. 遊離主題] , [2. 主題] V

しかし動詞の前に置くことができる要素は遊離主題の他にひとつだけである。遊離主題の後ろに 2 つのスロットを考える必要があるだろうか。また，もし遊離主題の後ろのスロットがひとつだとすると，それは主語スロット（図 1b）なのだろうか，それとも主題スロット（図 1c）なのだろうか。

遊離主題スロットに要素が入っている場合，その後ろのスロットに入ることができるのは主語だけである。また主語は，主題化されていなくても動詞の前に置くことができる。これらのことは図 1a あるいは 1b のように動詞の前に主語スロットがあると考える動機になる。主語スロットがあるとすれば主題化されていない主語が（12a）や（13b）のように動詞の前に置かれることについても説明ができる。しかしもしそうだとすると，なぜ主語は常に主語スロットに入らないのか。主語スロットがあるにも拘らず主題でも焦点でもない主語が（11a）のように動詞の後ろに置かれることはどのように説明できるだろうか。また，もし動詞の前に主語スロットがあるのならば，そこに主語が置かれているときに目的語を遊離主題スロットや主題スロット（図 1b の案では遊離主題スロットのみ）に置くことに問題はないはずであるが，なぜこれが妨げられるのか。

これらを検討するにあたり，他のバントゥ諸語の例を見てみよう。前置による主題化はマテンゴ語だけではなく他のバントゥ諸語にも見られる。以下はチェワ語とスワヒリ語の例である。

(40)〈チェワ語〉(Downing et al. 2004)

Mbúzí　iizi　mikáango　i-ná-zí-saak-a.
goats(10)　these(10)　lions(4)　SM(4)-PAST-OM(10)-hunt-INDIC
「これらのヤギは，ライオンたちがつかまえた。」

(41)〈スワヒリ語〉(中島 2000)

Mchezea　zuri　baya　hu-m-fik-a.
player(1)　goodness　badness　SM/HABIT-OM(1)-arrive-BF
「良きを弄ぶ者には，悪きがとりつく。」

(42)〈マテンゴ語〉(21a, b の再掲)

a. *__Kibê:ga__,　María　ju-a-gólúla　lí:so.
clay pot(7)　Maria(1)　SM(1)-PAST-wash/SF　yesterday

b. __Kibéga__　ju-a-gólúla　María　lí:so.
clay pot(7)　SM(1)-PAST-wash/SF　Maria(1)　yesterday
「土鍋はマリアが昨日洗った。」

チェワ語もスワヒリ語も基本語順は SV(O) で，主語の位置は，主題化されていない場合でも動詞の前である。そして主題化される要素は主語の前に置かれる。つまり主題の位置とは別に動詞の前が常に主語の位置として保たれている。このような言語では動詞の直前にあるスロットは「主語スロット」である。従って目的語が主題化される場合には，目的語は主語スロットの前に置かれる。

もしマテンゴ語でも動詞の直前にあるスロットがスワヒリ語やチェワ語と同じように主語スロットなのであれば，目的語を第 1 スロットか第 2 スロットのいずれかに置いて主題化できるはずである。ところがマテンゴ語では，動詞の前に主語がある場合には目的語をその前に置いて主題化することはできない。また，もし動詞の直前に主題スロットがあるのであれば，目的語が主題化されて文頭に置かれても，主語がその主語スロットに入ることの妨げにはならないはずである。しかし (42) が示すように目的語が主題化された場合には主語は動詞の後ろに置かなければならない。さらに，もし図 1b のように第 2 スロットが主語スロットなのであれば，主語以外の要素が主題化される場合にそれは第 1 スロットである遊離主題スロットにしか入ることができないはずである。しかし主題化される要素がひとつだけの場合には，それを第 1 スロットにも第 2 スロットにも入れることができることは (23) で示したとおりである。

このような問題が生じることから，図 1a，1b のように動詞の前に主語スロットがあると考えることは難しい。図 1c のように動詞の前に主題スロットだけがあると考えれば，非主題の主語が動詞の後ろに置かれること，主題化された主語以外の要素が遊離主題スロットだけでなく動詞直前のスロットにも入ることができること，主語以外の要素が動詞の直前に置かれた場合に主語が動詞の後ろに置かれることなどの説明がつく。また主語と目的語を同時に動詞の前に置くことができないこ

とについても，動詞の 2 つの項を同時に主題化することが避けられているためだと考えることができる。

ただし図 1c の案でも，なぜ主語は主題化されていなくても主題スロットに入ることがあるのか，という疑問は残る。これについては後ほど検討する。

4.2. 動詞の後ろのスロット

動詞の後ろに置かれる要素の共通点は主題化されていないことである。従って動詞の後ろに「非主題スロット」があると考えれば，動詞の後ろにある要素はすべてそこに置くことができる。しかし焦点がある場合には必ず焦点が動詞直後に置かれることから，焦点が入るスロットと焦点でも主題でもない要素が入るスロットとを分けて考える必要がある。動詞の後ろに「焦点スロット」と「非主題･非焦点スロット」という異なるスロットがこの順番で並んでいると考えれば，焦点が必ず動詞直後に現れることになる。主題化も焦点化もされていない要素が入るスロットは焦点スロットの後ろにあるが，焦点がない場合は焦点スロットが空欄になるため，その後ろの非主題・非焦点スロットに置かれた要素が動詞直後に現れる。

また連用修飾語が常に主語や目的語よりも後ろに置かれることから，非主題・非焦点スロットについても，主語や目的語が入るスロットと連用修飾語が入るスロットに分けたほうがよさそうである。すなわち次のようなスロットが考えられる。

図 2：動詞の後ろのスロット案

V	3. 焦点	4. 非主題・非焦点（項）	5. 非主題・非焦点（項以外）

図 2 のようなスロットを考えれば，（38）のように主語が他の要素と一緒に動詞の後ろにある場合に，動詞の後ろの語順は主語・目的語・連用修飾語に限られ，かつ，主語が必ず焦点化されること，またそれ以外の語順がすべて非文になることの説明もつく。動詞の直後には，（25）～（29）のように焦点が置かれることもあるし，（30）や（31）のように焦点化されていないものが置かれることもある。それは，焦点がある場合には焦点が第 3 スロットに入るが，焦点がない場合には，その後ろのスロット（第 4 スロットあるいは第 5 スロット）に置かれた焦点化されていない要素が動詞の直後に現れることになるからである。つまりこれらは動詞直後という同じ位置に現れているが異なるスロットに置かれていると考えられる。

もし連用修飾語が焦点化された場合にその後ろに別の要素を置くことが全くできないのであれば，主語や目的語だけが入るように焦点スロットを限定し，焦点化された連用修飾語が入るスロットを第 4 スロットの後ろに設定する必要がある。しかしながら時を表す連用修飾語が焦点化されている場合には，容認度が少し下がるにしても（37b）のように目的語をその後ろに置くことができる。つまり第 3 スロットに連用修飾語が入り，第 4 スロットに目的語が入ることも可能である。従って，焦点化された要素は，それが動詞の項の場合にも，連用修飾語の場合にも同じ第 3 スロットに入ると考えてよい。（37b）のような語順が好まれないのは，語順自体よ

りも，焦点以外の情報を伴うことで焦点が曖昧になってしまうことによると思われる（注 10 参照）。

4.3. 主題性とスロット

図 1 と図 2 の案を合わせると，マテンゴ語の語順は次のようなスロットで表すことができる。

図 3：マテンゴ語の語順

[1. 遊離主題] , [2. 主題] V [3. 焦点] [4. 非主題・非焦点（項）] [5. 非主題・非焦点（項以外）]

主題化された要素は第1スロットか第2スロットに置かれる。どちらか一方のスロットだけに要素が置かれる場合には要素の制限はないが，第 1 スロットと第 2 スロットの両方に要素が置かれる場合には，第 1 スロットは動詞の項以外，第 2 スロットは主語に限られる。第 2 スロットには主題化された要素が入る。ただし主語は，非主題の要素が他にある場合には，主語自体が焦点化されていない限り第 2 スロットに入る。従って，第 2 スロットに入る要素とその優先順位は，まず「主題」，次に「非主題・非焦点の主語」となる。焦点化された要素は第 3 スロットに入る。主題化も焦点化もされていない主語と目的語は第 4 スロットに（ただし主語は第 2 スロットに入る条件がそろっていない場合のみ），主題化も焦点化もされていない連用修飾語は第 5 スロットに，それぞれ入る。いずれのスロットも，該当するものがない場合にはそこには何も入らない。

さて各要素はそれぞれ，主題化されているか，焦点化されているか，あるいはそのどちらでもないかによって入るスロットがひとつ決まるが，主題化も焦点化もされていない主語が入るスロットの決定には「主題化されていない要素が主語以外にあるかどうか」というもうひとつの条件が関与する。これは本来ならば第 4 スロットに入るはずの要素である。しかしながら，主語以外の非主題の要素がある場合，すなわち第 3・第 4・第 5 スロットのいずれかに入る要素がある場合には，主語は第 4 スロットではなく第 2 焦点スロットに置かれる。これが残されている問題である。

これについて，主語が本質的に持っている主題性から考えてみることにする。通言語的にも主語が最も典型的な主題であると言われているが（Givón 1976, Lambrecht 1994 他），後述するようにバントゥ諸語においても主語には高い主題性を有することが求められ，主題性が極端に低くなれば「主語」という文法機能を保つことができなくなる。マテンゴ語では主題性が低くなっても主語の文法機能は保たれるが（これについては 5 節で述べる），主語が本質的に高い主題性を持っていることには変わりない。主語は，主題化されなくても主題スロットに入ることがあるが，同時に，他の従属語がある場合に主語を非主題として動詞の後ろに置くことができるのは主語が焦点化されている場合だけである。言い換えれば，焦点化されない限り主語は主題として扱われてしまう可能性があるということである。

そこで，主題がない場合はその次に主題性の高い「焦点化されていない主語」が主題スロットに入る，と考えることはできないだろうか。つまり，主題スロットに入るのは主題化されている要素だけでなく「主題性の高い要素」であり，焦点化されない限り主語は主題スロットに入るだけの高い主題性を備えているということである。これは明確に主題化された要素だけが入る遊離主題スロットと異なる点でもある。

また主語の主題性の高さに加えて，複数の従属語を持つマテンゴ語の動詞文が主題スロットに入る要素を要求することがその背景にあると考えるべきであろう。つまりマテンゴ語の動詞文では，従属語が動詞の後ろだけに並ぶことが好まれないということである。これは従属語の数が増えれば主語を動詞の後ろに置くのがより難しくなっていることに裏づけられる。

非主題の主語しか従属語がない文では，焦点化されていなくてもそれを動詞の後ろに置くことができるが，従属語が 2 つになると，焦点化されていない主語を動詞の後ろに置くことが難しくなる。しかし（34b）や（35b）は，容認度は低いがまだ非文というわけではない。ところが従属語が 3 つになると，（38）が示しているように，焦点化されていない主語を動詞の後ろに置くと非文になってしまう。また従属語がさらに増えると，（43）のように今度は主語を焦点スロットに置くことさえも難しくなってしまう。

（43）　a.　??Ju-a-handika　*Tómasi*　balúa　na-kalámu　lí:so.
SM(1)-PAST-write/SF　Thomas(1)　letter(9)　with-pen　yesterday
（*トマシが*昨日ペンで手紙を書いた。）

b.　**Balúa**　ju-a-handakja　Tómasi　na-kalámu　lí:so.
letter(9)　SM(1)-PAST-write/AP/SF　Thomas(1)　with-pen　yesterday
「手紙はトマシが昨日ペンで書いた。」

c.　Tómasi　ju-a-handakja　balúa　na-kalámu　lí:so.
Thomas(1)　SM(1)-PAST-write/AP/SF　letter(9)　with-pen　yesterday
「トマシが昨日ペンで手紙を書いた。」

わずかな差ではあるし，（43a）の容認度が下がるのは焦点以外の要素が後ろに多数並ぶことで Tómasi「トマシ」を焦点と見なすことが難しくなるためであると思われるが，いずれにしても従属語の数が増えれば主題スロットを空けておくことがより難しくなっている。（43b）のように主題化された要素がある場合には原則どおりそれが主題スロットに入るが，主題化されたものがない場合には，（43c）のように「主題性の高い要素」である主語が主題として扱われることになる。その際に主語以外の要素が入らないのは，それらの要素は主題化されない限り主題スロットに入るだけの主題性を備えていないからである。

この考えに沿って SVO と VS という 2 種類の語順についてもう一度検討してみよう。（44）では主語は唯一の従属語である。jímbwa「犬」は主題化も焦点化もさ

れていないので非主題・非焦点スロットに入る。従属語がひとつしかない場合には主題スロットに置く要素は特に要求されていないので本来のスロットである非主題・非焦点スロットに入る。(45) は主語以外に従属語がある。この場合は一方が主題スロットに入ることが望ましい。そこで，主題化はされていないが主題スロットの次なる候補である「主題性の高いもの」すなわち主語が主題スロットに置かれることになる。

「何があったの？」という質問に対する答えとして

(44)　Ji-a-búmíti　jímbwa.　(11a　再掲)
　　SM(9)-PAST-bark/PF　dog(9)
　　「犬が吠えた。」

(45)　Jímbwa　ji-a-mú-lumíti　ńge:ne.　(12a　再掲)
　　dog(9)　SM(9)-PAST-OM(1)-bite/PF　guest(1)
　　「犬が客をかんだ。」

このように，主題も焦点もない文が SVO あるいは VS の語順で現れるのは，それが優先されるべき基本語順だからではなく，要素の主題性に沿って各要素がスロットに置かれた結果である。従ってマテンゴ語では基本語順を SVO と考える必要はなく，また目的語の有無によって SVO と VS という 2 種類の基本語順を考える必要もない。図 3 に示した情報構造に基づいた語順だけを考えればよい。

5. 語順の役割と文法呼応の役割

SVO という基本語順は文を統語的に曖昧にしないための「セーフティネット」でもあると Bearth (2003) が説明しているように，多くのバントゥ諸語において，文法呼応だけでなく基本語順も文法関係を示す役割を担っている。ところがここまで見てきたようにマテンゴ語の場合には，語順が示しているのは情報構造であって，文法関係を示す役割は果たしていない。しかしマテンゴ語において文法関係が曖昧になっているわけではなく，特に「主語」という文法関係は主語辞によって厳密に保たれている。

マテンゴ語では，主語の主題性や文中での位置に関係なく，主語辞は常に主語 (logical subject) に呼応する。このことは，マテンゴ語に場所格倒置 (Locative inversion) や目的語倒置 (Object inversion もしくは S-O reversal) が起きないことにも裏付けられる。場所格倒置とは，場所を表す名詞句が主題化されて文頭に置かれた場合に，主語辞が主語ではなく文頭に置かれた場所を表す名詞句に呼応するという現象である。これはバントゥ諸語でかなり一般的に見られる現象である。また目的語倒置は，目的語が主題化されて文頭に置かれた場合に，主語辞が主語ではなく主題化された目的語に呼応するという現象である。これはルワンダ語やルンディ語など一部の限られたバントゥ諸語にしか見られない現象であるが，Meeussen (1967) はバントゥ祖語にこの現象があったとしている。

文頭が主題ではなく主語の位置である多くのバントゥ諸語においても，主語の主題性が極端に低い場合には主語を文頭に置くのが難しくなる。さらに，主語辞には文頭に置かれている要素に呼応しようとする傾向がある（Givón 1976，Bearth 2003，米田 2004，Morimoto 2006 他）。つまり主題性の低い主語は，主語の位置に置くことができなくなるだけでなく，文法的にも主語として扱われなくなるということである。場所格倒置や目的語倒置はその典型例である。いずれも主語以外の要素が主題化されているために主語の主題性は低くなり，主語は動詞の後ろに置かれる。そして主語辞は，主語ではなく文頭に置かれた要素に呼応している。

しかしマテンゴ語ではこれらの現象は起きない。主語以外の要素が主題化されることで主語の主題性が低くなっても，またその結果として主語が文中のどこに置かれることになっても，マテンゴ語の主語辞はあくまで主語に呼応する。

場所格倒置

(46)〈チェワ語〉(Mchombo 2004)

a. Njôka　y-a-gón-á　pamkéka.
snake(9)　SM(9)-PERF-sleep-INDIC　Loc(16)　mat(4)
「へびは／がゴザの上で寝ている。」

b. Pa　mkéka　pa-a-gón-á　njôka.
Loc(16)　mat(4)　SM(16)-PERF-sleep-INDIC　snake(9)
「ゴザの上ではへびが寝ている。」

(47)〈マテンゴ語〉

a. Máhimba　ga-a-támíti　mu-kítengo.
lion(6)　SM(6)-PAST-live/PF　Loc(18)-forest(7)
「ライオンは／が森に住んでいた。」

b. *__Mu-kítengu__　mu-a-támíti　máhimba.
Loc(18)-forest(7)　SM(18)-PAST-live/PF　lion(6)
（森にはライオンが住んでいた。）

c. __Mu-kítengu__　ga-a-támíti　máhimba.
Loc(18)-forest(7)　SM(6)-PAST-live/PF　lion(6)
「森にはライオンが住んでいた。」

目的語倒置

(48)〈ルワンダ語〉(Kimenyi 1980)

a. Umuhuûngu　a-ra-som-a　igitabo.
boy(1)　SM(1)-PRES-read-ASP　book(7)
「少年が／は本を読んでいる。」

b. __Igitabo__　cyi-ra-som-a　umuhuûngu.
book(7)　SM(7)-PRES-read-ASP　boy(1)
「本は少年が読んでいる。」

(49)〈マテンゴ語〉

a. Nsóngolo　ju-soma　kitâ:bo.
boy(1)　SM(1)-read/BF　book(7)
「少年が本を読んでいる」

b. *__Kitábu__　ki-soma　nsóngo:lo.
book(7)　SM(7)-read/BF　boy(1)
（本は少年が読んでいる。）

c. __Kitábu__　ju-soma　nsóngo:lo.
book(7)　SM(1)-read/BF　boy(1)
「本は少年が読んでいる。」

マテンゴ語でも主題性の低い主語を文頭に置くことはできない。しかしマテンゴ語には，（47c），（49c）も示しているように主語辞が文頭に位置する要素に呼応しやすいという傾向はなく，主語の主題性にも語順にも左右されずに主語辞は常に主語に呼応している。

Morimoto（2006）はバントゥ諸語の主語辞の呼応を以下の 3 種類に分けている。

① salience-based topic：主題性が最も高い項に呼応する。
② basically role-based agreement system：基本的には主語に呼応するが，主題性が低い主語には呼応しない。
③ role-based subject：主語に呼応する。

また Morimoto（2006）は，Meeussen（1967）によってバントゥ祖語に場所格倒置や目的語倒置が再構されていることから，「主語辞」と呼ばれている接辞はもともと主語ではなく主題に呼応する接辞であり，上記の 3 種類の呼応システムは，呼応対象が主題から主語へ移行する歴史的過程であると述べている。つまり，かつては文頭が主題の位置であり，接辞は文頭にある主題に呼応していたが，次第に，主題の位置に最も頻繁に現れる主語に呼応する接辞として解釈されるようになり，さらには文頭が主語の位置として再解釈されるようになったということである。従って③は，主題呼応から主語呼応への移行が最も進んだ形ということになる。

マテンゴ語もこの過程に沿っていると考えるならば，主語辞が主語に呼応するという点では，マテンゴ語はすでに③のレベルである。ところが Morimoto（2006）が③に属する言語の例として挙げているチェワ語でも，（46b）で示したように場所格倒置は起きる。最も主語呼応への移行が進んでいるグループに属するチェワ語でさえ，場所を表す名詞が主題化されて文頭に置かれると，主語辞は主語には呼応しなくなる。この点において場所格倒置が起きないマテンゴ語の呼応は，③の中でも主語呼応への移行がより進んでいる言語ということになる。しかしながら，文頭が主語ではなく主題の位置であるという点においてはマテンゴ語は①と同じであり，主題呼応を最も保っている①の言語と同等に，主題と非主題が区別されている。

6. おわりに

マテンゴ語では，情報構造は語順によって示され，文法関係は文法呼応によって示される。バントゥ諸語には，情報構造が主にプロソディによって示されるものと語順によって示されるものがあると言われているが（Downing et al. 2004），マテンゴ語は典型的な後者の言語であると言えるだろう。また，多くのバントゥ諸語において，主語辞の呼応には主語の主題性や（それに起因する）文中での位置が関係しているが，マテンゴ語の主語辞の呼応はそれらとは無関係である。

マテンゴ語がバントゥ諸語の中でも主題が確立している言語であることはこれまでにも述べてきたが（米田 2004），それだけでなく，主語に関してもかなり明確に確立している言語であると言える。主題については主題が接辞によってマークされる言語と同レベルに，また主語についても，主語が接辞によってマークされる言語と同レベルに（あるいはそれ以上に）区別されている。このようなマテンゴ語の例は，バントゥ諸語の中に，これまで報告されてきた主題が重視されるものと主語が重視されるものだけではなく，主題と主語の両方が，それぞれ語順と文法呼応という別々の手段によって明確に区別されるものも存在していることを明らかにしたと思われる。

さて本稿では，主語との関係もあり，情報構造のなかでも主題に重点を置くことになった。マテンゴ語と同じく情報構造が語順によって示されると言われているマクワ語（Stucky 1985, Van der Wal 2006）やマトゥンビ語（Odden 1984）では，焦点を提示するために用いられる活用形があり，その活用形の直後に置かれる要素には焦点としての情報価値が厳密に要求される。マテンゴ語でも，単純形（注 5 参照）は本来は焦点の提示に用いられる活用形である。しかしながらマテンゴ語の場合には情報的条件を満たしていない「ダミーの焦点」を後続語にすることができるなど，単純形においても焦点がかなり形骸化していると思われる場合がある。活用形と焦点の関係は今後の課題である。また本稿では適用形のように 2 つの目的語をとる構文と焦点との関係を扱うことができなかった。これも今後の更なる調査と検討が必要である。

参　照　文　献

Bearth, Thomas (2003) Syntax. In: Derek Nurse and Gérard Philippson (eds.) *The Bantu languages*, 121–142. London: Routledge.

Bresnan, Joan and Sam Mchombo (1987) Topic, pronoun, and agreement in Chichewa. *Language* 63: 741–782.

Downing, Laura, Al Mtenje and Bernd Pompino-Marschall (2004) Prosody and information structure in Chichewa. *ZAS Papers in Linguistics* 37: 177–186.

Givón, Talmy (1976) Topic, pronoun and grammatical agreement. In: Charles, Li (ed.) *Subject and topic*, 149–188. New York: Academic Press.

Kimenyi, Alexandre (1980) *A relational grammar of Kinyarwanda*. Berkeley/Los Angeles: University of California Press.

Lambrecht, Knud (1994) *Information sturucture and sentence form*. Cambridge: Cambridge University Press.

Mchombo, Sam (2004) *The syntax of Chichewa*. Cambridge: Cambridge University Press.

Meeussen, Achille Emile (1967) Bantu grammatical reconstructions. *African Linguistica* 3: 79–121.
Morimoto, Yukiko (2006) Agreement properties and word order in comparative Bantu. *ZAS Working Paper* 43: 161–187.
中島　久（2000）『スワヒリ語文法』東京：大学書林.
Odden, David (1984). Formal correlates of focusing in Kimatuumbi. *Studies in African Linguistics* 15: 275–299.
Stucky, Susan U. (1985) *Order in Makua syntax*. New York: Garland.
Van der Wal, Jenneke (2006) The disjoint verb form and an empty immediate after verb position in Makhuwa. *ZAS Working Paper* 43: 233–256.
米田信子（2000）『マテンゴ語の記述研究―動詞構造を中心に―』博士論文．東京外国語大学.
米田信子（2004）「マテンゴ語の主題―他のバンツー諸語との比較」益岡隆志（編）『主題の対照』171–190．東京：くろしお出版.
米田信子（2006）「マテンゴ語の「補完語」と情報構造」加藤重弘・吉田浩美（編）『言語研究の射程』189–211．東京：ひつじ書房.
Yoneda, Nobuko (2006) *Vocabulary of the Matengo language*. Tokyo: Research Institute for the Languages and Cultures of Asia and Africa.

著者連絡先：
540-0004　大阪市中央区玉造 2-26-54
大阪女学院大学　国際・英語学部
yoneda@wilmina.ac.jp

［受領日　2007 年 12 月 6 日
最終原稿受理日　2008 年 2 月 2 日］

Abstract

Information Structure and Word Order in Matengo

Nobuko Yoneda
Osaka Jogakuin College

Matengo is a Bantu language spoken in the south-west part of Tanzania. Its word order is determined by information structure. The principles of sentence formation in Matengo are (i) the topic of the sentence occurs in sentence-initial position, and (ii) non-topical elements occur post-verbally, and the focus of the sentence (if there is one) occurs immediately after the verb. The position of each element is determined according to these principles. However, there is one case which does not follow them. When a verb has two or more arguments and none of them is topicalized, the subject is placed in the topic slot even though it is not topicalized. It is suggested that this happens because of the high topicality which the subject has inherently. Thus, the element which can be placed in topic slot is not exactly a topic, but rather an "element high enough in the topicality." that is, a non-focused subject.

In many Bantu languages, agreement of subject marker is related to both the topicality of the subject and its position in the sentence. In Matengo, however, topicality relates only to word order. The subject marker in this language strictly agrees with subject, regardless of its topicality and the position in the sentence. This means that grammatical relation is shown by grammatical agreement and information structure is shown by word order.